ガラテヤ2:2-10　勝利に向かって走る

「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。」（1コリント9:24）私は、使徒パウロが走者だった、あるいは走者に憧れていた、と言われても納得できます。彼は、このガラテヤ人への手紙を含め、いくつかの手紙の中で走ることについてのアナロジー(類推法)を用いています。今日の聖書箇所からは、パウロの初期のクリスチャンライフを垣間見ることができます。｢私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないため｣（ガラテヤ2:2）、彼が啓示によってエルサレムに上り、異邦人の間で宣べていた福音を使徒たちに示しに行ったことが書かれています。今日のメッセージでは、 (霊的に)走る、ということについて、それがむだにではなく勝利を得るための走りになるための要因を学んでいきたいと思います。

ガラテヤの教会が持っていたであろう疑問の一つに、「なぜ他の教師ではなくパウロに従わなければならないのか」ということがありました。今でこそ歴史を振り返ればパウロのメッセージが正しかった、ということは容易に理解できますが、初代教会にとっては混乱を招くものだったことでしょう。後知恵は先見よりも良い、と言いますが、過ぎてから物事を理解するのは簡単です。パウロに敵対していた者は、正当な恐れや不満がありました。まず一つに、イエス様の地上での宣教活動の初期の頃にパウロは一緒にいませんでした。当時イエス様の周りにはおそらく何人か偽教師がいて、イエス様の教えを直接受けていたことでしょう。二つ目に、偽教師がみことばを使って主張していたのに対し、パウロのメッセージはまるで詐欺師のように話がうま過ぎる、と思われたことでしょう。最後に、偽教師たちは「私たちを奴隷に引き落とそうと」（ガラテヤ2:2）するため巧みな言葉と魅惑を使い、おそらく｢光の御使い｣（2コリント11:14)）のようにやって来るのに対し、パウロはあまり姿を現していませんでした。

パウロは主から個人的に受けた啓示（ガラテヤ1:11）についていくらでも語ることはできたでしょう。しかし彼はすでに、すべての超自然的な啓示は神からによるものではない、ということを明確にしていました。実際神から超自然的な啓示を受けたと主張する人々によって作り出された偽の福音もいくつか存在します。すでに聖書に書かれていたことと矛盾するようなパウロの主張は特に、そのような偽の福音と何ら変わらなく受け取られたことでしょう。パウロがもしもただ一つのこと － ヤコブ、ペテロ、ヨハネとの交わり － をしなければ、彼の走りはむだに終わっていたことでしょう。この話の興味深いところは、パウロはおそらく自分自身でこれを実行したわけではない、ということです。ガラテヤ書を読むと、当時パウロはこの人たちのことをあまり良く思っておらず、「おもだった者と見られていた人たち」（ガラテヤ2:6）と呼んでいます。しかし彼は、ただ受けた啓示に従って（ガラテヤ2:2）彼の福音を伝えに彼らに会いに行くのです。この純粋な従順が、パウロの走りをむだにではなく用意された栄冠を得るものにしたのです。

クリスチャンを迫害･殺害するために奔走していた者がクリスチャンとなり、主ご自身から超自然的に福音を受け、命を賭けて福音を宣べ伝え…と、パウロの証は驚くべきものですが、これらもすべて、ただ主に従い、当時はそれほど良く思っていなかった他の信者との交わりをしなければ何もならなかったでしょう。もしもパウロが啓示に従わず、ヤコブ、ペテロ、ヨハネとの交わりなしに、単に自分一人の力で進んでいたら、彼の宣教は忘れ去られ、彼の手紙は捨てられ、彼の走りはむだに終わっていたことでしょう。誰も失格者をかばってはくれません。パウロが失格にならなかったのは、それほど重要ではないと思われた啓示に従ったからです。しかしその従順が彼がむだに走ることにならないためにきわめて重要だったのです。今日、あなたは神様から受けた啓示に従順に、神の恵みに生きていますか？